

富士川河口地域における反射法地震探査 Seismic Reflection Survey around the Mouth of Fuji River

伊藤 忍^{1*}; 山口 和雄¹; 入谷 良平¹; 山中 義彰²; 伊東 俊一郎²; 村田 和則²
ITO, Shinobu^{1*}; YAMAGUCHI, Kazuo¹; IRITANI, Ryohei¹; YAMANAKA, Yoshiaki²; ITO, Shun'ichiro²; MURATA, Kazunori²

¹ 産業技術総合研究所, ² サンコーコンサルタント株式会社

¹GSI, AIST, ²Suncoh Consultants Co., Ltd

2014 年 2 月に、富士川河口地域において反射法地震探査を実施した。この地域では富士川河口断層帯が確認されている。下川ほか (1996) はこの地域で反射法地震探査を実施し、入山瀬断層を確認している。また、静岡県総務部地震対策課 (1996) は中山断層を確認している。我々の目的は、過去の研究よりもこれらの断層周辺の構造をより詳細に把握することである。調査路線は 2 本である。測線 1 (FJK1) は、富士川河口から西に海岸沿いを通り、向田川に至り、長さは 3.5km 程度である。測線 2 (FJK2) は、富士川右岸を海岸から 2km 程度北のほぼ東西の路線であり、いわゆる蒲原地震山を横切る。FJK2 の長さは 1km 強である。震源は大型パイプレーター (IVI 社製 Y2400) を使用した。FJK1 と FJK2 のスイープ周波数はそれぞれ 10-100Hz と 10-120Hz とした。いずれの測線においても、スイープ長は 12 秒、記録長は 16 秒とした。受振には Sercel 社製 SG-10 (固有周波数 10Hz) とサンコーコンサルタント社製の分散型探鉱機 DSS-12 を使用した。FJK1 の同時展開長は約 1km である。FJK2 は固定展開とした。いずれの測線においても受振器は 5m 間隔で設置した。FJK1 の発震記録例には反射波と推定されるイベントが見られる。しかしながら、これらは堤防によって生成されている可能性もある。今後、詳細な結果を示す予定である。

キーワード: 反射法地震探査, 富士川

Keywords: seismic reflection survey, Fuji River